

3 授業実践

(2) 検証授業の分析と考察

考察の視点

本研究では、外国語活動における「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指した授業を実践して、相手意識をもってコミュニケーション活動をするための手立てを講じた単元構成の工夫をした研究を進めてきました。この指導の有効性について、授業実践に示した単元の授業を基に、以下の2点の視点に基づいて考察します。児童の変容は、事前事後の外国語活動に関するアンケートの結果、毎時の振り返りカードの自己評価や記述内容、授業中の行動・発言観察、単元後の感想の記述、発表等の授業記録から見取ります。

考察の視点

ア 簡単な語句や表現を使って、身近な事柄について伝えることができたか。

イ 相手意識をもって、コミュニケーションを図ろうとしていたか。

○ 外国語活動に関するアンケートについて

外国語活動におけるコミュニケーション能力や思考・判断・表現等に関する質問項目を作成し、児童自身に単元前と単元後に自己評価をさせました。4項目の中から選んで答えさせ、理由を記述させました。

○ 振り返りカードについて

言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行うという過程を経ることで、学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動へつなげたりして、「思考力・判断力・表現力等」を高めていくことが大切になる。

中央教育審議会 『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』 平成 28 年 8 月 p. 9

毎時の目標と評価規準に照らし合わせた質問項目を設け、1時間の授業の最後に授業を振り返らせました。

ア 簡単な語句や表現を使って、身近な事柄について伝えることができたか。

簡単な語句や表現を使って、身近な事柄について伝えることができたかについては、次の2点について分析、考察しました。

(ア) 簡単な語句や You can ～.の文を用いて話すことができたか。

(イ) 簡単な語句や方略的能力を使って、伝えたい身近な事柄について伝えることができたか。

いずれも、4時目の発表の児童の様子や毎時の振り返りカードの自己評価や記述内容を基に分析、考察します。

(ア) 簡単な語句や You can ～.の文を用いて話すことができたか。

「CEFR の話すこと（発表）に関する、国の指標形式の主な目標」（次頁表 1）を参考にして、友達や先生の「できること」の発表における英語表現の判定基準表（次頁表 2）を作成して評価しました。

表 1 CEFR の話すこと（発表）に関する、国の指標形式の主な目標

CEFR 自己評価表	Pre-A 1	A 1
国の指標形式 の主な目標	<input type="checkbox"/> 定型表現を用いて、簡単な挨拶をすることができるようにする。 <input type="checkbox"/> 自分や身の回りの物事に関するごく限られたことについて、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。	<input type="checkbox"/> 簡単な語句や文を用いて、自分について話すことができるようにする。 <input type="checkbox"/> 日常生活において必要となる基本的な情報を伝えることができるようにする。 <input type="checkbox"/> ごく身近な事柄や出来事について、事実、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて短く話すことができるようにする。

表 2 発表における英語表現の判定基準表

	C	B	A
判断する めやす (判定基準)	身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて話すことができない。	身近な事柄や出来事について、相手のサポート（自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれる など）があれば、簡単な語句や You can ～.の文を用いて話すことができる。	身近な事柄や出来事について、既習の簡単な語句や You can ～.の文を用いて話すことができる。
人数	0 人 (0%)	13 人 (24%)	42 人 (76%)

B 評価の、友達や指導者のサポートを受けて、You can ～.の文を用いて話すことができた児童は、全体の 14% でした（図 1）。例えば、“You can volleyball.”（発表表現ママ）と発表した児童に対して、よく聴いていた児童が、「play」は？」と助言をしました。それを聴いて、もう一度言い直して発表することができていました。また、A 評価の、既習の簡単な語句や You can ～.の文を用いて話すことができた児童は、76% でした。慣れ親しんだ語句や文を用いたり、既習の英語表現を組み合わせたりして、話すことができました。55 人全ての児童が You can ～.の文を用いて、パフォーマンスを発表することができました。

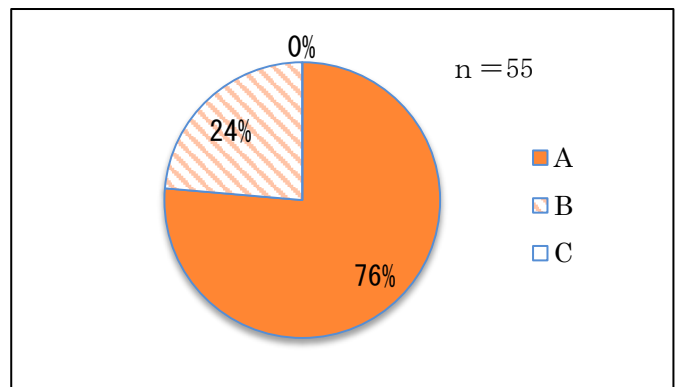


図 1 発表における英語表現の結果

(イ) 簡単な語句や方略的能力を使って、伝えたい身近な事柄について伝えることができたか。

次に、話すことができた児童の発表内容で、どのような方略的能力を使って表現しているのかを分析しました。方略的能力とは、知っている英語表現を組み合わせたり、絵を描いて伝えたりする工夫をして、何とか表現しようとする能力です。児童の表現している内容から見取りました。単元の中で学習した英語表現を使って話すことができた児童や、方略的能力を使って話すことができた児童がいました（表 3）。

表 3 児童の発表内容

発表表現ママ

児童の表現	理由
単元の中で学習した英語表現を使って発表した内容	
You can play basketball.	遠いところから、ロングシュートをしてきたからです。
You can play the guitar.	guitarを習っているからです。
You can swim.	1 k mも、ずっと休まないで泳いだからです。
You can swim.	(泳げなかったけど) 頑張って、10mも泳ぐことができるようになったからです。
You can clean.	掃除を念入りにしているから。
You can play soccer.	サッカーでは、キャプテンをしていて、皆をまとめようとがんばっているからすごいと思う。
You can … volleyball.	キャプテンになって、みんなを引っ張っているからです。
知っている英語表現を組み合わせて表現して発表した内容	
You can play dash jump. (ALT: long jump)	走り幅跳びのとき、記録を伸ばそうといっぱい練習をしていた。
You can run fast. Because …	いっぱい練習をしているから。
You can be good friends. Because you can play together.	仲良くしてくれる。(遊びに誘ってくれる)
You can いっぱい配りもの.	進んで配りものをやっているから。
You can レオナルドダビンチ. (draw)	いつも絵を描くのがうまいからです。
You can free study.	自学を毎日がんばっているから。
You can free study.	いつも空いている時間にやっていてすごいと思う。
You can play トランプ. (カードゲーム)	昼休みにいつも一緒にしてくれるから。

①単元の中で学習した英語表現を使って話すことができた児童・・・55人中28人
play, swim, cook, ride, piano, recorder, basketball, soccer, baseball, badminton, table tennis
②知っている英語表現を組み合わせて表現した児童・・・55人中27人
(例)・跳び箱・・・jump box ・縄跳び・・・jump rope ・幅跳び・・・dash jump ・自由学習・・・free study, my study ・トランプ・・・play トランプ など

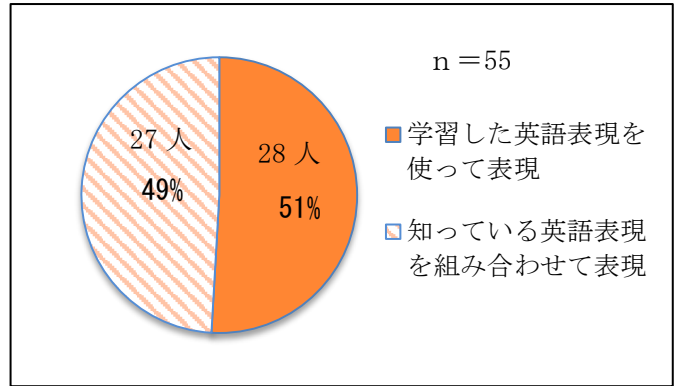


図2 発表で用いられた英語表現の分析

資料1 発表で用いられた英語表現の分析

<u>知っている数少ない外国語をみんなに伝えるように工夫するのは大変だけど上手に調べてみます。</u>	ほかとびのことを考えていたら、 <u>さんが一緒に考えてくれて「ジャンプ」にしたら？</u> とアドバイスをくれたのでうれしかったです。
<u>日本語と英語にかえてみるとなりの人やうしろの人たちがいっしょに考えてくれました。</u> みんなのいいところをたくさんかいたのでよかったです。	いろいろな日本語を、自分なりの英語になおしたりできた。とてもおもしろくて、おもしろかったです。今日は、 <u>手にとり頭をつかいました。</u>
<u>縄跳びを、どうやって表すかが難しかったけれど、<u>飛ぶは「ジャンプ」、縄は「ロープ」と表すことができた。</u></u>	<u>飛び箱を英語で習っていたけれど、</u> <u>さんが「ジャンプボックス」と言ったので「すこい、な」と思いました。私も</u> <u>さんの様に積極的に発表できるようになりました。</u>

下線は筆者による

資料2 知っている英語表現を組み合わせて表現した児童の感想

単元の中で学習した英語表現を使って話すことができた児童は55人中28人で、知っている英語表現を組み合わせて表現した児童の人数は、55人中27人でした(図2)。既習の英語表現をそのまま使った児童と、自分で表現を新たに考えた児童が、およそ同数でした(資料1、図2)。資料2の下線部からは、伝えたい事柄をどのような英語表現を使って表現しようかと児童が試行錯誤しながら思考していることがうかがえます。このことから、児童は、既習の英語表現の中から言葉を選んで発表内容を考えるのではなく、伝えたい内容があって、その内容をどのような英語表現を使って表現しようかと思考していると思われます。

(ア) (イ)の分析結果から、本手立てを取ったことは、思考力を働かせながら簡単な語句や表現を選び、伝えたい身近な事柄について表現しながら伝える力が付いてきている効果があると言えます。

イ 相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとしていたか。

相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとすることができたかについては、1時目の「友だちや先生たちの『できること』を英語で、何人ぐらい言いたいですか」と尋ねた結果と、3時目のワークシート「友だちや先生の『できること』を発表しよう！」に書いた人数、そして、4時目の発表の様子から見取ります。

表4 友達や先生の「できること」を英語で、伝えたい人数（1時目）

n = 56

伝えたい人数	0人	1人	2人	3人	4人	5～10人	11～15人	15人以上	全員	
数	0	8	5	16	5	13	5	2	2	
%	0	14	9	29	9	23	9	4	4	
評価	C: 0人	B: 29人			A: 27人					
%	0%	51%			49%					

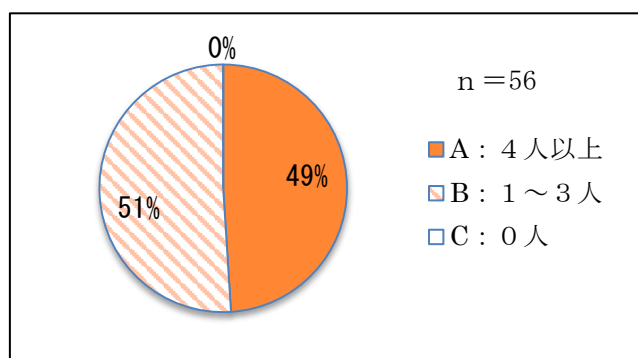


図3 伝えたい友達や先生の人数の割合

表5 友達や先生の「できること」について、ワークシートに書いた人数（3時目） n = 55

書いた人数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6～10人	11～15人	
数	0	1	4	6	13	22	8	1	
%	0	2	7	11	24	40	15	2	
評価	C: 0人	B: 11人			A: 44人				
%	0%	20%			80%				

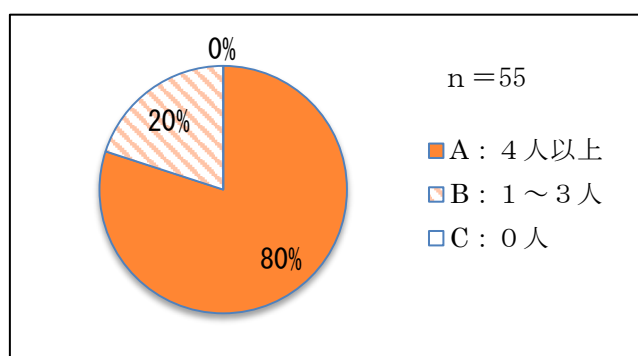


図4 友達や先生の「できること」について、ワークシートに書いた人数の割合

表 6 発表における表現の判定基準表

	1	2	3	4
判断する めやす (判定基準)	友達や先生の「できること」を考えよう としない。 相手意識：相手に関 心をもたず、関わろ うとしない。	友達や先生の「できること」に関心はあ るが、友達や先生の ことを伝えようとし ない。 相手意識：相手に関 心はもっているが、 自分から関わろうと はしない。	友達や先生の「できること」に関心をも って、表現し伝えよ うとする。 相手意識：相手に関 心をもっており、関 わろうとする。	友達や先生の「できること」に関心をも って、その理由まで 伝えようとする。 相手意識：相手に関 心をもち、関わりな がら、相手の立場や 気持ちを感じたり、 理解したりしようと する。
人数	0人	0人	1人	54人
%	0%	0%	2%	98%

1時目にパフォーマンス課題の設定をして、「友達や先生たちの『できること』を英語で、何人ぐらい言いたいですか」と尋ねると、伝えたい人数を1～3人と答えた児童が51%、4人以上と答えた児童が49%でした（前頁表4、図3）。また、3時目に、発表する内容をワークシートに書いた人数は、1～3人が20%、4人以上が80%でした（前頁表5、図4）。児童は、日頃の友達の姿を見つめたり、思い起こしたりしながら、具体的に友達や先生の「できること」とその理由を記述していきました。また、4時目の発表では、友達や先生の「できること」に関心をもって、表現し、伝えようとした児童が2%、それに理由も加えて発表した児童が98%でした（表6）。

これらの結果から、単元のゴールに、児童の思いや考えを伝えるパフォーマンス課題を設定し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする場面設定をしたことで、児童が相手に関心をもち、相手の日常の行動を思い起こして、その行動や考えに心を寄せ、その姿を積極的に伝えようとしていたことがうかがえます。